

発表2

儒礼における埋葬への視線

東北大学大学院 高橋 恭寛

1. はじめに—儒者と〈死にゆく身体〉—

本発表は、江戸時代における儒者の言説を取り上げることが中心となる。〈過去の人々がどのように考えていたのか〉という視角もまた、現代の状況や我が身を振り返って考えるときの一つの契機や、考える材料にもなり得るのではないかと思う。

実際に、江戸時代の儒者も、臨終の場における〈死にゆく身体〉に全く関心が無かった訳では無い。儒教の葬礼の教科書『文公家礼』〈初終〉（臨終のこと）について解説する際、注意を促している。当人の状態を考えず、『文公家礼』という教科書通りの礼法を行うことで、反って危篤者の死を早めてしまうことを指摘していた。

①若林強斎『家礼訓蒙疏』巻一〈初終〉（1728年跋・1781年刊）

病気によって少しも動かすことが出来ない場合もある。あるいは急死もあるし、卒中の場合もある。また、家によっては表座敷のないことがあるが、まずは大柩の格式をこのように立てて臨終のときに正しさを失わないようにという主旨を理解すれば、病人や家々の事情によって、どのようにでも適正な終わり方を処置出来る。もしこの主旨を知らずに「居場所を遷す」と『家礼』に書かれている通りに気付け薬をも用いず、揺り動かして寝床を遷すのは死を早めると言うものである。

他にも、この「臨終」のシーンを解説する際に、無理な延命で苦しみを長引かせず、そっと安らかに「臨終」を見守ることも大切と述べる儒者もいた（川島直正『喪葬私考』上巻〈初終〉、1804年序）。

無論、彼らが儒者らしい独特なことを言っているわけではない。そもそも、江戸時代における「看取り」というテーマであれば、歴史学の方面からの研究も少なくない。前近代以来の「看護」や「看取り」についての歴史学的な研究として、例えば新村〔1991〕や柳谷〔2011〕などが挙げられよう。

五五 ただ儒者が、葬祭の教科書たる『文公家礼』を用いる際に、この「死にゆく身体」への視点自体があることは大切なことだと思われる。

一般的に言って、儒教の葬礼では「靈魂」の取り扱いが中心的な問題であった。亡くなった「死者の魂のゆくえ」が儒教においては大きな関心事だったのだ。死者の靈魂がどこへゆくのか、子孫はどうやって靈魂を祭祀すればよいのか、などが理論と実践と相絡まって、葬礼などの死者祭

祀の礼法が考察されてきた。

本発表では、『文公家礼』を受容した儒者たちにとって「靈魂」が関心の中心であった一方で、「死にゆく身体」そして「死者の身体」に対しても確かな視線を有していたことに注目してゆく。

2. 儒教における「死」と祭祀

既に前節で用いたように、江戸時代の儒者たちが死者葬礼の参考書として利用したのは、「朱子学」で知られる中国の大儒・朱熹の作と見なされる『文公家礼（朱子家礼）』（以下、『家礼』と略す）であった。『家礼』は本来、冠婚葬祭に関する儀礼の教科書であったが、日本ではとりわけ葬祭の参考書として受容された。本来中国のものであった『家礼』の記述内容を取捨選択し、日本の風土に合わせて、どのように実践すればよいのか注釈を付けている。ここに日本の儒者なりの「儒礼」の在り方が見えてくるのである。

『家礼』では、「初終」（＝臨終）に始まり、「沐浴」・「着替え」・「喪祭についての諸道具」など、具体的な葬礼の手順が記されている。これらの具体的な手順のなかで、どうやって「靈魂」を正しく祭ることが出来るのかという課題を日本の儒者たちがあれこれと考察していた。

「靈魂」の正しい祭りが問われていたのはなぜなのか。これは、江戸期の儒者が「死」をどう捉えていたのかという問題と繋がっている。そこで、儒学における「死」を巡る問題について、概略的に説明しておきたい。

朱子学には、まず、この世を構成する物質素材は「気」であるという世界観がある。この「気」が集まることで、人は「生」の状態となり、この「気」が散じることで「死」の状態となると考えられていた。「気」の聚散が繰り返される世界のなかに、人間の「生」と「死」もまた位置付けられていると言えるであろう。

ひとたび、この「気」が散じてしまったら、二度と集まることはない。「魂魄」と呼ばれるものは、散じてしまった「気」のなかでも上昇して天へと散っていくのが「魂」で、沈んでいって地へと散じていくのが「魄」である。

それでは、人間の「魂魄」が天地自然へと散じてしまったならば、天地自然に散ってしまったはずの「自分の父親の魂」や「先祖の靈魂」なるものを個別に祭ることが可能なのだろうか。

朱子学では、息子など子孫が誠敬の心を尽くして祭ることで、子孫の「気」と感応し、一時的に集まってくると説明されている。しかし、どうして感応するのか、朱熹がその理論を説明しきれているとは言えず、疑義を呈する儒者も現れた。朱熹が最終的な解決を果たせたとは言えず、「たましいをどのように祭るのか」ということは、祭祀の教科書『家礼』を利用する際にも、重要なトピックとなる。日本でも三宅尚斎『祭祀来格説』（1708年成立）なる書が著されて、祖先祭祀の確かさを論証しようと試みているように、散じてしまう靈魂をどのように祭るのかという課題は引き継がれていた。

日本における『家礼』受容に関する先行研究としては、田尻〔1983〕をはじめ、近年では田〔2012〕などがある。日本の風土に合わせた『家礼』受容が試みられていたことは、既に述べた

通りである。日本の風土では、中国の礼法をそのまま行うことは出来ない。必要な作法を取捨選択した上で『家礼』の実践を試みていたのである。

紙幅も限られているため、魂魄の問題に限って極簡略言えば、日本の儒者が『家礼』を実践する場合、魂魄が散じて消滅するという説を前提としつつも、祭祀によって「神主（仏教の〈位牌〉に相当するもの）」に「神霊」を宿す、ということを重視する傾向があった。神主に魂を宿して「気」が散ずることを防ぎ、家とともに存するという礼法が展開された。霊魂の永続性への深い関心のもとに、日本の儒者は『家礼』受容を模索していたのである。

このように、死者の魂こそが大きな問題となっていた一方で、冒頭で見たような「死にゆく身体」への視線も『家礼』には存していたのである。それでは、「死にゆく身体」や「死者の身体」に対して、日本の儒者はどのように対応していたのであろうか。

3. 遺された「身体」に対する視線

まず、儒教は、基本的に土葬である。『家礼』にも埋葬手順や棺の問題などが順に記されている。広く江戸時代を通じて言えば、土葬だけではなく、火葬も少なからずおこなわれていたことは、木下〔2012〕などで指摘されているところである。

また、江戸儒教における火葬・土葬問題と言えば、仏教批判を延長線上に置いた火葬批判や、親の身体を火にくべることがそもそも「不孝」であると見なす文脈で読み解かれることが多かった（高橋〔2006〕など）。

ここでは、代表的な『家礼』注釈書の若林強斎『家礼訓蒙疏』（1728年跋・1781年刊）を中心に、「遺された身体」をどう位置づけているのか見てゆこう。

冒頭で引用したように、安らかに死者を看取ったあとであるが、そのまま「霊魂」のみを重視する作法へと向かっていったわけではない。その「遺された身体」も粗末に扱わず、いつまでも遺体が保っていてほしいと願うものだと述べている。

②『家礼訓蒙疏』巻三〈治葬〉

まだ朽ちないうちに、こちらから早く土に還るようにする心づもりはない。何とかして保存に心を尽くすはずである。結局のところ、親孝行の心をもってしてみれば、自然の摂理があるとは分かっていても、いつまでも遺体が保っていてもらいたいと思うより他に考えはないはずなのだ。

五
三

そのため、葬る土地選びはもちろんのこと（引用は省略）、棺を作るときに雨や土に強い材質などにも注意を促している。

③『家礼訓蒙疏』巻三〈治棺〉

柏木、こちらの国では棺にするような大木は無い。杉は中国の土地では強い材木のように

思われるが、こちらの国の杉は雨露にさらされるには強い。土に埋めて湿度や熱気に蒸されてしまっは朽ちやすい。松も水に対しては強い。土に埋めては弱い。くすのきは雨露にさらされては石のような強度になるけれど土に埋めてはそのようなものではない。こちらの国では、本椈（マキ）よりも土に埋めて長く朽ちないものはない。

ただし、付け加えるならば、『家礼』においても（『性理大全』所収の『家礼』には）中国北宋の大儒、程伊川の「記葬用柏棺事」という記事を注釈で引いてきており、『家礼』でも全く「遺体の保全」に興味がなかったわけではないように見える。

④『二程全書』巻六四、伊川先生文六「記葬用柏棺事」

程子曰、昔の人の葬儀では、親の身体が土に還ってほしいとは思って居なかった。今も珍しい物ならば大切に保蔵して汚れたり傷ついたりすることを防ごうとする。まして親の遺骨ならなおさらである。（中略）また土に還ることを望まず、まだ土へと還っていないうちは、保蔵することは当然そのようにすべきであろう。

しかしながら、本来の『家礼』では、この程伊川の一文が見えるのみである。その一方で、日本の若林強斎『家礼訓蒙疏』のなかでは、この程伊川の一文を踏まえた「遺体の保全」を説く注釈が、数カ所（〈作灰隔〉・〈治葬〉など）で見られ、「遺体の保全」という話題を各箇所で展開させるのである。

ところで、中国で展開した代表的な『家礼』注釈書に、丘瓊山の『家礼儀節』（1485年刊）がある。この『家礼儀節』も、朱熹の時代とは異なる時代での『家礼』実践を求めた書であった。ただ、佐々木〔2009〕が明らかにしているように『家礼儀節』は、『家礼』が課題としていた嫡長子主祭という非現実的な祭礼世界の是正を試みていた。そして当然、程伊川「記葬用柏棺事」の注釈も省略されている。

これを踏まえると、「日本の風土では、何を取捨選択していくべきか」がそもそも前提であった上、魂の永続性に深い関心のあった日本の『家礼』受容は、『家礼儀節』とは全く異なる展開を見せたことが分かる。

その上、程伊川「記葬用柏棺事」という記事と「遺体の保全」への注目は、日本において大いに拡大したものであったと言えるのではないだろうか。

4. 東北への波及—仙台藩儒の場合—

五二

ここまで、葬祭の参考書『家礼』を受容するときに主題である「靈魂」の問題とは別に、「遺体の保全」についても儒者が気を遣っていたことを見てきた。

さて、このような「埋葬」における「身体の保全」という問題を、東北の儒者はどのように展開したのであろうか。ここで、仙台藩儒に田辺樂斎（1754～1823）という人物を取り上げたい。

彼は、仙台藩の藩校「養賢堂」の塾頭となった儒者である。儒葬関係では、『家礼筆解』・『喪祭考』・『喪祭抄略』などを著している。ここでは『喪祭考』（1813年刊）に注目する。

『喪祭考』では、江戸後期における葬祭の実践を考察した書に相应しく、様々な葬儀のパターンを取り上げている。数例を挙げると、以下の通りである。

- ・ 兄が亡くなりその子供が幼くて、喪主となるべき喪祭は、その弟が代わりの喪主とならねばならないこと
- ・ 嫡子が他国に引っ越して住んでいて、庶子が国にのこっている場合、庶子が代わりに喪祭を執り行うこと
- ・ 父母が同じ日に亡くなった場合

『喪祭考』には、上で引用した若林強斎『家礼訓蒙疏』をはじめ、様々な『家礼』注釈書を参照しているところが見られ、それまでの『家礼』受容の論点を前提としていることも窺える。そんな楽斎もまた「遺体の保全」を考慮していると思われる話がある。

⑤『喪祭考』〈墓祭〉

日本の風習では、子供が生まれて三ヶ月にも満たずに亡くなれば、入棺せず庭の隅に埋める。どうして、そのようなことをするのか訪ねたところ、その子が家に祟りを為すからだという話だった。これは、縁起担ぎとして拘っている風習に過ぎず、甚だ礼法に合わないと言える。……子供が生まれて三ヶ月に満たずに亡くなった場合でも、棺に入れて、お墓に葬ることは、問題ない。

三ヶ月で亡くなった子供でも粗雑に扱わず、入棺すべきことを論じていた。どんな小さな子でも、死者を死者として大事にお棺に入れて葬ることを論じていることから「遺体の保全」の更なる展開も見出だすことが出来るのではないだろうか。

5. まとめ

田辺楽斎が葬儀の多様性に応じ、そして埋葬に関しても柔軟に対応していたことが、東北特有のことであったどうかは定かでない。ただ、死者を棺に大事に入れて葬るということが、江戸後期の東北藩儒・田辺楽斎に至るまで一貫していたことは読み取れるであろう。臨終のシーンで死者を安らかに見守るところから始まり、埋葬の場面に至るまで、「死にゆく身体」を大切にするという意識は、日本の儒者において自覚的であった。死者を送る際、「たましいの行方」を位置づけるのとは別の次元において、「死者の身体を大事にする」という視点をどこかに持つことによって、〈死者との繋がり〉や〈供養〉という問題に応じようとしていたのではなからうか。

参考文献

- 木下光生 2012 「近世の葬送と墓制」 勝田至篇『日本葬制史』第4章
- 佐々木愛 2009 「明代における朱子学的宗法復活の挫折—丘濬『家礼儀節』を中心に—」
『社会文化論叢』5
- 高橋文博 2006 『近世の死生観』 ぺりかん社
- 田尻祐一郎 1983 「綱斎・強斎と『文公家礼』」 『日本思想史研究』15
- 田世民 2012 『近世日本における儒礼受容の研究』 ぺりかん社
- 新村拓 1991 『老いと看取りの社会史』 法政大学出版局
- 柳谷慶子 2011 『江戸時代の老いと看取り』 日本史リブレット92 山川出版社